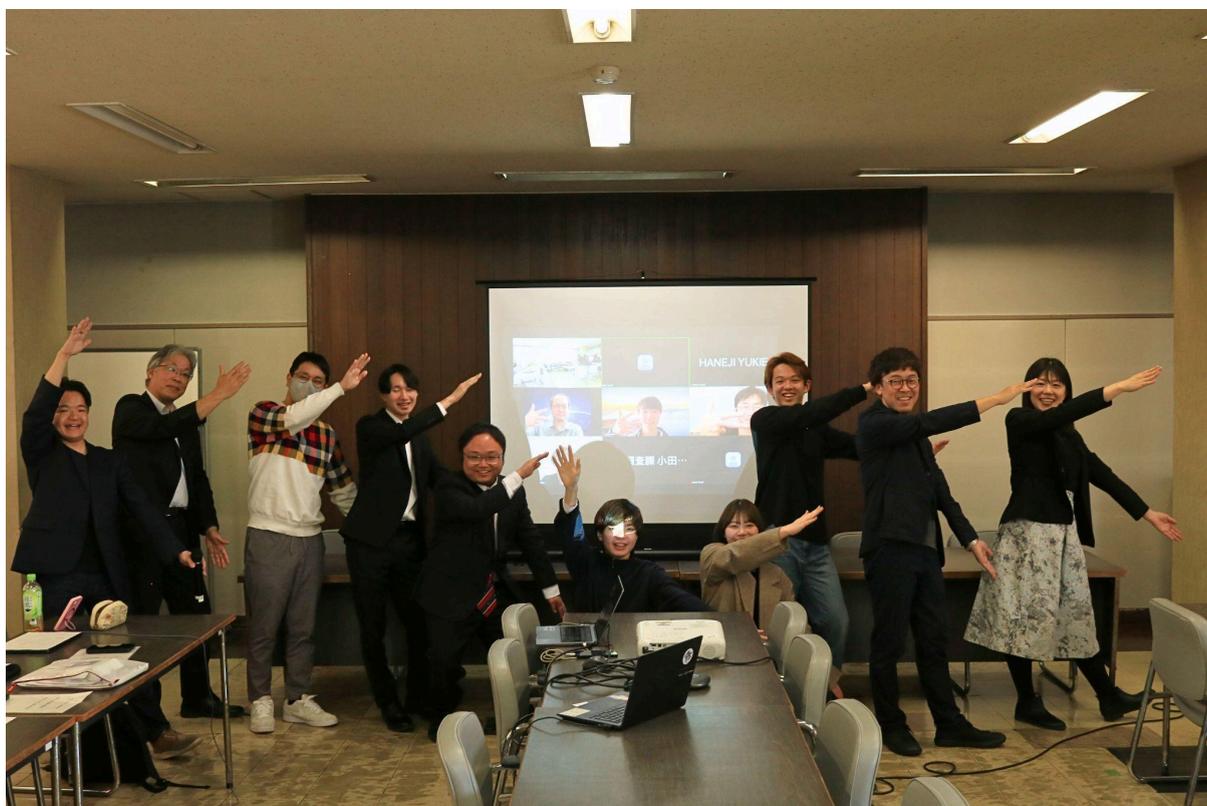


【活動報告】第3回ワークショップ開催



2026年3月7日(土)、全3回にわたり実施してきた「熊谷未来デジタルワークショップ」。本プロジェクトの集大成として、参加学生たちが描いた「未来の熊谷」の最終発表会を開催いたしました。

■学生の思いがカタチに。熊谷の未来を共に描く最終発表会

冒頭、政策調査課スマートシティ推進担当の市原副参事より、開催にあたっての挨拶がありました。

令和5年度よりスタートした熊谷市のスマートシティの取り組みについて、「単なる市民サービスの向上にとどまらず、熊谷市の持続性のために、若者が生き生きと過ごし、新たな産業を育てていくこと」こそが真の目標であるという、力強いメッセージが贈られました。

また、本ワークショップの意義として、「データやデジタルを活用した学生ならではの提案から気づきを得ることで、共に将来を描いていきたい」との言葉があり、マインクラフトで具現化されたアイデアを実際の業務にも活かしていきたいという、学生たちの創造性への大きな期待が寄せられました。



■多角的な視点で未来を育む、産官学の交流

発表に先立ち、本プロジェクトを支えてきたメンバーが一同に介し、一言ずつ挨拶を行いました。



熊谷市役所の皆様をはじめ、スマートシティやデジタル分野を専門とする4名のアーキテクト(現地1名、オンライン3名)、マイクラフトでの具現化を技術面で支えたSmile Me株式会社、そして事務局の株式会社想結び。さらに、主役である参加学生と、彼らの試行錯誤に一番近くで寄り添い続けた「学生のまちリレー会議」の伴走支援学生たち。

発表を控える参加学生から、一人ずつ意気込みが語られ、会場は最終発表にふさわしい心地よい緊張感と期待感に包まれました。

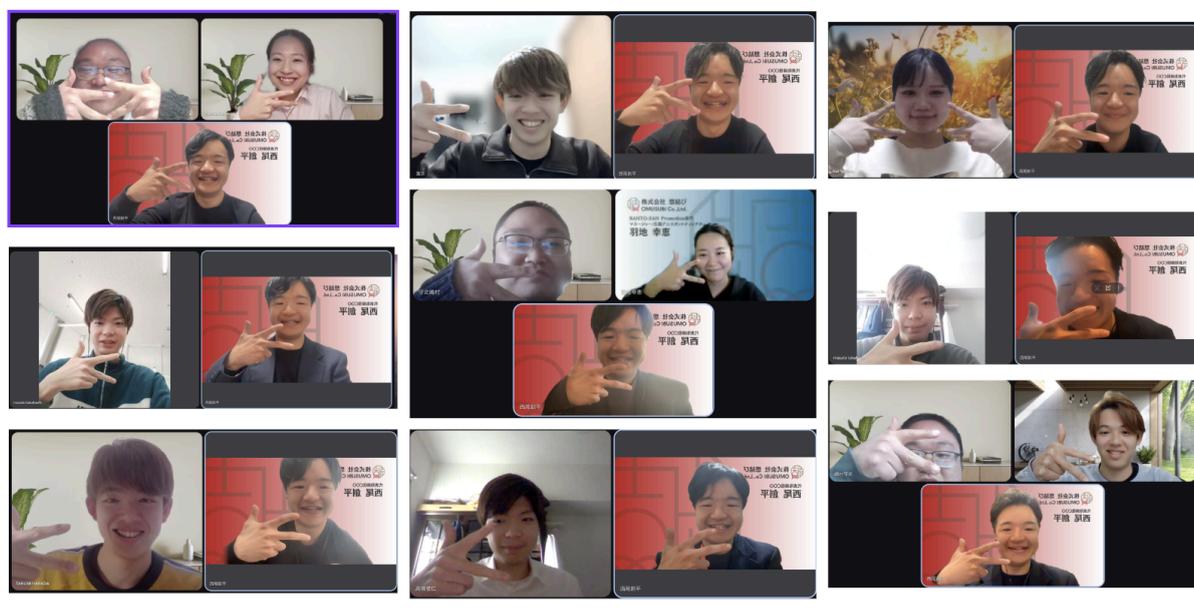


■伴走支援と次年度へのビジョン

参加者紹介に続き、事務局を務める株式会社想結びの代表・西尾創平より、本ワークショップの開催意義、そして運営メンバーである「学生のまちリレー会議」が担ってきた「伴走支援」の背景が語られました。



本ワークショップは、「よくある単発のワークショップ」に終わらないよう、学生が学生を支える伴走支援を走らせながら取り組んできました。実際に、この1ヶ月間で20回以上ものオンライン・オフラインでの伴走支援が行われ、その都度記録を積み重ねてきました。



「マイクラフトを活用することで、学生たちのアイデアが消えることなく次年度へも引き継がれ、積み重なっていく。熊谷への想いが詰まったワールドにしていきたい」と、デジタル活用の真意が述べられました。

さらに、次年度に向けた力強いビジョンを共有。

現在進行している「学生のまちリレー会議」をベースに、運営を担う学生団体を本格始動させ、人材育成とコミュニティ形成を並行して加速させていく構想です。「今回の参加者が、次は運営側として後進を育てる。参加して終わりではなく、デジタルインターンとして活躍できる人材へと成長していく循環を作りたい」

アーキテクトの方々とも連携し、熊谷から政策をリードできるような学生を輩出していく。そんな「地域のバトン」をつなぐ未来への決意に、会場の士気も一段と高まりました。

■【発表①】ドローン×スマートシティ熊谷：空を都市のインフラへ

トップバッターを務めたのは、立正大学の高橋さん。彼は「猛暑都市から、日本の未来のインフラをつくりたい」という強い信念のもと、ドローンを都市の基幹インフラとして統合運用するプラットフォーム事業を提案しました。



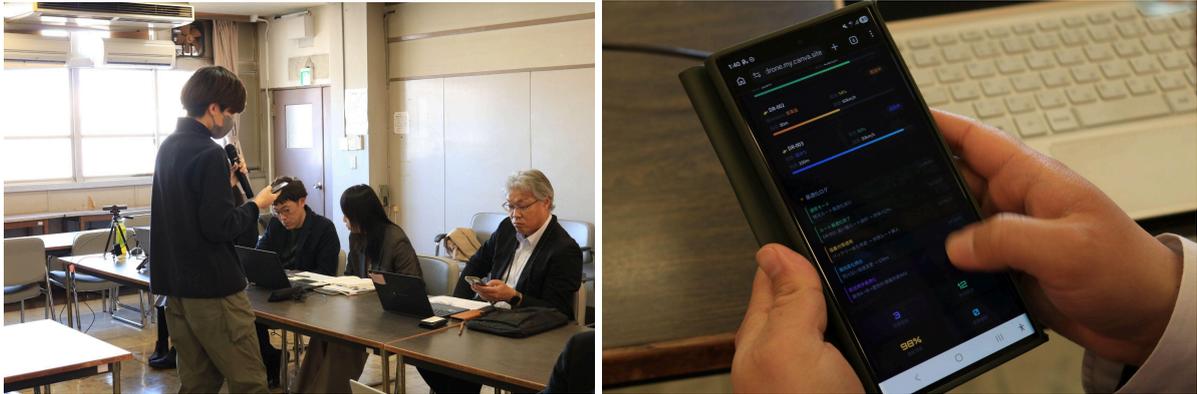
高橋さんは、40度を超える猛暑、少子高齢化、水害リスクといった熊谷の「制約」を、むしろ新しい仕組みを生み出すための「可能性」と捉え直しました。

猛暑で外出が困難な際の配送、通学路の見守り、災害時の状況把握、そして環境観測。これらを一つのプラットフォームでつなぐことで、いかなる状況下でも都市機能が止まらない「空が都市を支える社会モデル」を構築するという壮大なビジョンです。

マイクラフト上では、用途別に色分けされたドローン拠点を見事に具現化。単なる機体の配置にとどまらず、都市の中にどう組み込まれるかという「拠点」の概念まで作り込まれたワールドは圧巻でした。



また、発表の途中には自ら開発した専用アプリのデモンストレーションも行われ、データの統合管理までを見据えたクオリティの高さに、会場からは驚きの声が上がりました。



発表後、伴走支援を担当した「学生のまちリレー会議」の後藤さん(神戸大学)からは、振り返りが語られました。



「ドローンを単なる手段ではなくインフラとして整備するアイデアを深めるため、競合事例を分析した上で『熊谷ならではの強み』を導き出すプロセスに注力しました」と報告。また、伴走する側にとっても自らの出身地(神戸)を見つめ直すきっかけになったと述べ、「次回は学生だからこそできるメンターとしてさらに成長したい」と、後進を支える決意を新たにしました。

また、最前線で活躍するアーキテクトの皆様、大島副市長から、実現を見据えた具体的なアドバイスが贈られました。

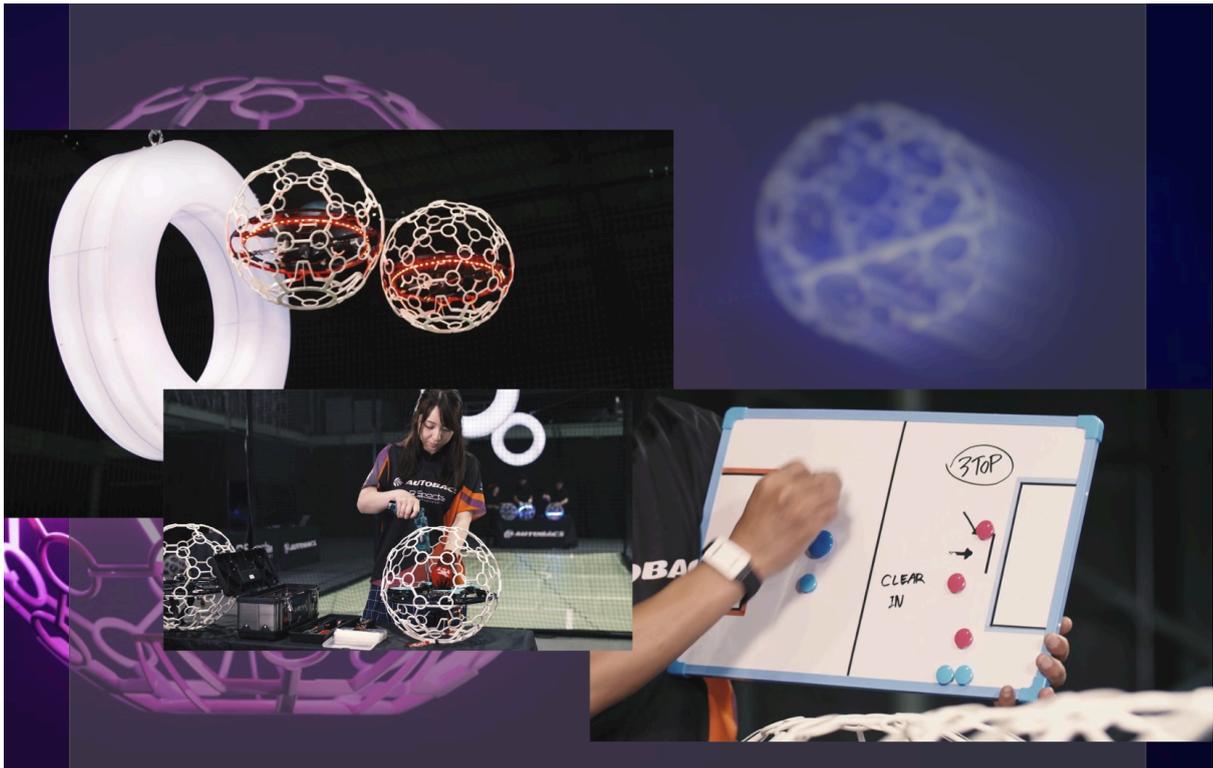


<講評時のアドバイス>

- ドローンを単なる手段ではなく「インフラ」として整備しようとする着眼点が非常に良い。
- 飛行制限区域やプライバシー、市民の受容性など、都市部で運用するための課題を整理し、まずは大学内での実験から始めるというアプローチは現実的である。
- 住民や市民を主語に据え、数ある手法の中で「なぜドローンが最適なのか」という目的をさらに絞り込むことで、より説得力のある提案になる。
- 自作アプリのUI(ユーザーインターフェース)の完成度が非常に高く、データの可視化が優れている。
- 熊谷特有の「熱」への耐性や安全面を考慮し、ドローンならではの価値を研ぎ澄ませていくことを期待したい。

■【発表②】ドローンサッカーによる多世代健康交流プロジェクト

続いて、オンラインから参加した立命館大学の南茂さんは、熊谷が抱える夏季の活動制限や「ラグビータウン」の季節的ギャップという課題に着目。全世代が熱狂できる次世代テックスポーツ「ドローンサッカー」を軸とした、新しい地域活性化の形を提案しました。



南茂さんは、ドローンサッカーを単なる娯楽にとどめず、教育と健康、そして都市の象徴へと昇華させる2つの柱を提示しました。

1つ目は、子どもたちへのSTEM教育やシニア層の健康維持を目的とした「スクール事業」。2つ目は、「ラグビーのまち」に次ぐ新たな象徴としての「プロチーム創設」です。

猛暑下でも屋内で観戦を楽しめるエンターテインメントを提供しつつ、地元企業との共同実証や、近隣大学と連携した高度なDX人材育成プログラムの実施など、多角的な構想が語られました。

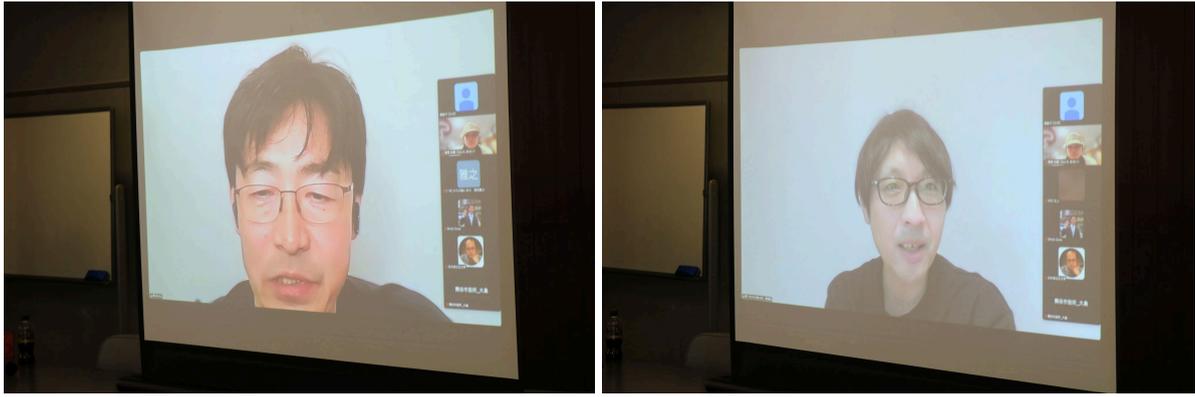
「日本一暑いまちを、日本一熱いまちへ」という力強いスローガンとともに、年齢や性別、気象条件に左右されない持続可能なコミュニティの姿を、マイクラフト上の専用アリーナという形で具現化しました。



発表後、伴走支援を担当した「学生のまちリレー会議」の今榮さんからは、振り返りが語られました。



「南茂さんの秀でている点は、徹底したリサーチ力です。当初は興味の対象が広く、具体的な課題解決の着着地点を見つけるまで試行錯誤が続きましたが、『誰かのために』という強い想いが、最終的にドローンサッカーという形に結実しました」と、その粘り強いプロセスを称えました。



<講評時のアドバイス>

- 熊谷の「ラグビータウン」としての個性を活かし、季節的な課題をスポーツの力で補完するコンセプトに非常に共感が持てる。
- 楽しみながらDXに触れられる点は面白い。既存の屋内施設を活用しやすく、実現のゴールがイメージしやすい提案である。
- プレイした人々が周辺地域へ立ち寄るような、地域経済への波及効果や広がりを期待したい。
- eスポーツ等との差別化や競技人口の増やし方、高齢者も参加しやすい「ミニ・ドローンサッカー」のような柔軟なルール設定など、運用の具体化に期待したい。

■【発表③】AI分析を活用した暑さ対策スマートウォッチ（青山学院大学・松井さん）

3人目の松井さんは、「熊谷市に住む子どもたちが安心して遊べる街にしたい」という思いから、未就学児とその保護者をターゲットにした「暑さ対策スマートウォッチ」の企画を提案しました。



松井さんは、子どもが大人よりも地面に近く、照り返しの影響を強く受けることや、自ら体調の変化を訴えるのが難しい点に着目。3D都市モデルによる「影」のデータ、地面からの反射光、地表温度、街中の風通しといった多角的なデータをAIでリアルタイム分析し、子どもの安全を守る仕組みを構想しました。

具体的には、AIが安全な移動時間を提案する「スケジューリング機能」、日陰を優先した「最短ルート提案」、そして熱中症リスクを知らせる「危険通知機能」の3つを装備。

マイクラフト上での説明までは時間内で難しかったが、スマートウォッチを装着した様子をアバターで表現した。また、ワールド内を歩くと「涼しい場所に避難してください」とプログラミングされたコメントが表示される仕組みで、スマートウォッチの機能を再現しました。



「暑さを我慢するものから、管理できるものへ」という社会の転換を、学生らしい感性と最新技術の融合で描き出しました。

発表後、伴走支援を担当した原田さん(青山学院大学)からは、振り返りが語られました。



「2回目からの参加という短い期間でしたが、最短ルートの検索というアイデアを軸に、ターゲットをあえて子育て世代に絞り込むなど、深い洞察がありました。伴走する私自身も学びが多く、次回はさらに伴走スキルを磨いていきたいです」と、共に成長した1ヶ月を振り返りました。

<講評時のアドバイス>



- 子育てしやすい街を目指す熊谷市にとって、未就学児に特化した提案は非常に意義深い。

- 暑さ指数の肝となる「湿度」の捉え方や、アラート後の具体的な行動設計など、情報の信頼性を高める視点が重要である。
- 全国展開を見据えた「標準的機能」と、熊谷に特化した「拡張的機能」を分けることで、ビジネスとしての横展開の可能性が広がる。
- 屋外作業員への労務管理など、既存のニーズと照らし合わせながら、収益の継続性を市とアーキテクトが共に議論していく余地がある。
- 技術的には実現可能だからこそ、「好循環を生む仕組み」をどう作るかというビジネスモデルの議論を深めていきたい。

■【発表④】「熱」で人を癒やす、未来のスマートベンチ(東洋大学・嶋村さん)

最後に登壇したのは、東洋大学の嶋村さんです。彼は、自ら熊谷の街へ2度のフィールドワークを敢行。「冬のベンチは冷たく、滞留している人が少ない」という実体験に基づき、人の熱を感知して座面温度を一定に保つ「未来のスマートベンチ」を提案しました。



嶋村さんの提案は、単なる温度調整にとどまらず、太陽光発電による夜間の照明機能、スマートフォンの充電、Wi-Fi接続など、都市の利便性を高める多機能性を備えています。さらにAIを活用して生成した「おしゃれで映える」デザインや、夜の街を彩る「ムーディーな雰囲気」といった情緒的な価値も重視しました。

マイクラフト上では、思わず立ち寄りたくなるような温かみのある滞在スペースを具現化。「温度が一定であること」が、街に新たな賑わいと憩いを生む様子を描き出しました。



発表の締めくくりには、「まちづくりやデジタル技術、プレゼンテーション手法など、得られた知見はこれからの人生において非常に有意義なものでした」と、プロジェクトを通じた自身の成長と関係者への深い感謝が述べられました。



発表後、伴走支援を担当した事務局の西尾(株式会社想結び)からは、振り返りが語られました。「有事の際には自家発電の拠点となり、デザインに特化すれば賑わいを生む。そこから商店の活性化へとつながる、地域経済の好循環を見据えた提案となりました」と、単なるプロダクト提案を超えた広がりを称えました。

<講評時のアドバイス>



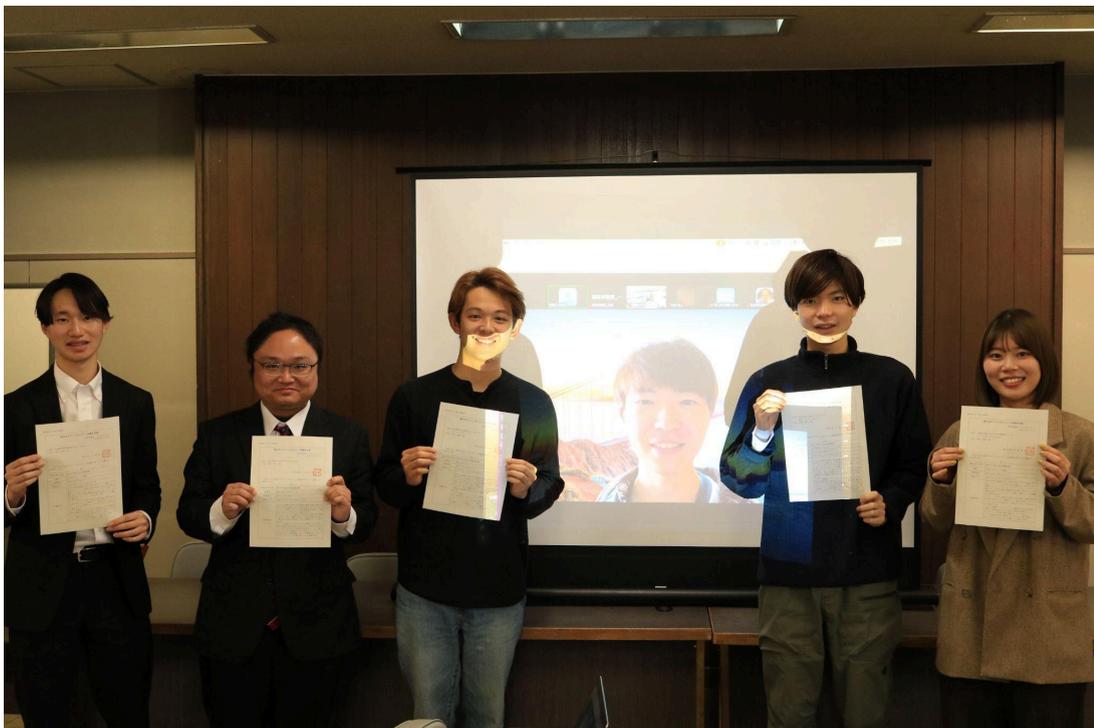
- 実際に街を歩き、肌で感じた違和感から着想したアプローチが非常に素晴らしい。
- 「何もない街にはベンチを置け」と言われるほど、ベンチは街を変える力を持っている。滞留を生むことを「目的」としたとき、集まった人々へどのような価値を提供し、周辺の星川エリア全体にどう波及させるかという「点から面へ」の設計を期待したい。
- 既存事例(裾野市など)のリサーチに基づき、耐久性やメンテナンス性を考慮している点も評価できる。
- 一方で、居心地が良すぎるための長時間滞留や、動物の集まり、設置コストといった現実的な課題に対し、イベント時限定の「移動式ベンチ」などの柔軟な運用案も検討の余地がある。
- 利用者に合わせた温度調整など、パーソナライズされたサービスへの進化や、広告モデルによる収益化など、ビジネスとしての自走可能性についても議論を深めていきたい。

■「地域の担い手」としての第一歩。活動証明書の交付

全4名の熱のこもった発表を終え、プログラムの締めくくりとして「タウンマネジメント活動証明書」の交付式が執り行われました。

この証明書は、全3回にわたるワークショップを完走した参加学生、そして彼らの試行錯誤を一番近くで支え続けた伴走支援学生に対し、熊谷市のまちづくりビジョンに基づく取り組みに主体的に参画したことを市が公式に証明するものです。

一人ひとりに証明書が手渡されると、会場は温かな拍手に包まれました。受け取った学生たちの表情には、1ヶ月間悩み抜き、デジタル技術を通じて自らのアイデアを形にした達成感と、これからの熊谷を担う一員としての誇りが溢れていました。



■総括：未来を創る「視点」のリレー

全ての発表と証明書交付を終え、本プロジェクトを支えた各代表から、学生たちへ最後のエールが贈られました。

大島副市長「皆様のアイデアは非常に大切なものです。今後はそれが『社会課題解決ビジネス』の入り口になることを期待しています。単にお金をかけるのではなく、どうすれば好循環が生まれるか、マイナスをプラスに変えられるかという視点を持ち続けてください。アーキテクトの皆様から頂いた多角的な視点を一般化し、次のステップへと繋いでいく、まさに『リレー』のような取り組みにしていきたいと思います。」

白木氏(アーキテクト)「学生さんたちの熱心な取り組みから、私自身も自分にはない視点を学ばせていただきました。新しいことを始めるにはアイデアが不可欠です。このような機会を提供した熊谷市に感謝しつつ、学生の皆さんの今後の活躍を心から応援しています。」

山口氏(Smile Me株式会社)「マイクラフトで想いを形にするのは難しい挑戦だったと思いますが、皆さんの『こんな未来があったらいいな』という熱意が形になっていました。ゲームは想いを伝えるための強力なツールです。マイクラフトだからこそ表現できる世界に、次回もぜひチャレンジしてほしいと思います。」

西尾氏(株式会社想結び)「このような新しい場に自ら飛び込んでいく勇氣と気持ちを、これからもずっと忘れずに、歩み続けていってください。」



「日本一暑いまち」を舞台に、マイクラフトという自由なキャンバスで繰り広げられた今回のワークショップ。

学生たちが描いたのは、最新技術を手段として、いかにして「人」を幸せにするかという、極めて人間味のあるスマートシティの姿でした。今回授与された「タウンマネジメント活動証明書」は、彼らが単なる参加者ではなく、熊谷の未来を共に考える「当事者」になった証でもあります。

今回の参加者が次年度は「運営側」として後進を育てていく。持続的な人材育成の循環を見据え、これからの熊谷をどのように色づかせていくのか。次年度に向けた新しいフェーズへと動き出しました。